

生きがいについて

奥野本洋

昭和五十六年に、日蓮聖人の七〇〇遠忌を迎えるが、その記念すべき時代に我々は生きている。大聖人が命をかけ、流布しようとした題目が、今や何千万人という人々に唱えられている。がはたして、日蓮聖人はその事を、素直に喜こべるのだろうか。聖人の心とは反した気持で受持されている題目が多いのではなからうか。大聖人の本当のお気持を知り、それに則った題目を受持すべきである。この事は、在俗、出家を問わぬ我々すべての問題である。が特に僧侶にとっては尚さらである。我が日蓮教団には何万という僧侶がいるが、これら一人一人の行動が道にかなったものであるならば、その檀信徒という者を導き、世の中をも良くする事が可能である。聖人は松野殿御返事に次の如く述べられている。

受けがたき人身を得て、適ま出家せる者も、仏法を学し謗法の者を責めずして、徒らに遊戯雑談のみして明し暮さん者は、法師の皮を著たる畜生也。法師の名を借りて世を渡り身を養ふといへども、法師となる義は一もなし。法師と云ふ名字をぬすめる盗人也。恥づべし、恐るべし。」(昭定二二七二)

今日、右の御書を読み、反省する僧侶は多いことであろう。大聖人滅後、七〇〇年たった今、大聖人の心持ちを吟味し、それを弘めようとする自覚に欠けているのだろうか。

我々は立場上、葬儀に列する機会が多いが、死人を引導しようとしても、生きてゐる者を引導する事を忘れ、さらに、自分自身もやがては死すという事すら忘れがちなのである。ただ莫然と、あと何十年位は生きられるという安心のもとに、なんとなく時日をすごしているのが現状である。大聖人の生涯において、決して一日たりとも無駄には出来なかつた事を考えれば、我々も貴重なる日々を怠惰におくれるはずがない。このような事を言えば、我々は日夜努力精進し、教化布教に努めているという方も多々あるだろうが、そのような方の中にも、寺門を繁榮させ、檀徒を増やし、名譽だ地位の為に邁進する人も少なからずあるだろう。

末世には、狗犬の僧尼は恒沙の如しと仏は説かせ給ひて候也。文の意は、末世の僧、比丘尼は名聞名利に著し、上には袈裟衣を著たれば形は僧、比丘尼に似たれども、内心には邪見の剣を掲げて、我出入する檀那の所へ余の僧尼をよせじと無量の讒言を致し、余の僧尼を寄せずして檀那を惜まん事、譬ば犬が前に人の家に至て物を得て食ふが後に犬の来るをみて、いがみはへ食ひ合ふが如くなるべしと云ふ心也。是の如きの僧尼は皆々惡道に墮すべき也。」(昭定二二三一松野殿御返事)

末世の僧等は仏法の道理をばしらずして、我慢に著して師をいやしみ、檀那をへつらふなり。但正直にして少欲知足たらん僧こそ、真実の僧なるべけれ」(昭定一二五四、曾谷殿御返事)

大聖人の言われる真実の僧でありたいが、はたして如何。聖人は、自分の行動、考え等を、法華経等の鏡に写し、照らし合はされた。我々は己れの我慢偏執から、自分勝手な解釈をしがちである。やはり、大聖人が残された御書を、かたみと思い、明鏡とすべきである。大聖人は開目抄中に次の如く述べられている。

父母の頸を刎、念仏申さずわ。なんどの種々の大難出来すとも、『智者に我義やぶられずば用いじとなり。』其

他の大難、風の前の塵なるべし。……（昭定六〇一）

これは大変な自覚である、それほどに信じ行ぜられた方の遺されたものが御書であるから、我々が智者となり日蓮を越える事がないかぎり、大聖人の言われたことを信じていくべきである。

聖人は、法華初心成仏鈔の中で、よき僧侶について次下の如く述べられている。

よき師とは指したる世間の失無くして、聊のへつらふことなく、少欲知足にして慈悲有らん僧の、經文に任せて法華經を読み持ちて人をも勤めて持たせん僧をば、仏は一切の僧の中に吉第一の法師也と讃められたり。」（昭定一四二三）

我々が、良き僧侶となるには、法華經を読み持ち、人にも持たせねばならぬ。法華經を持つべきという次のような筋道からである。

已説とは法華より已前の四十余年の諸經を云ふ。今説とは無量義經を云ふ。当説とは涅槃經を云ふ、此三説の外に法華經計り成仏する宗也と仏定め給へり。余宗は仏涅槃し給ひて後、或は菩薩、或は人師達の建立する宗也。

仏の御定を背きて、仏の立て給へる宗を用ゆべきか。又何れをも思ひ思ひに我心に任せて志あらん經法を持つべきかと思ふ処に、仏是を兼て知し召て、末世濁世の世に真実の道心あらん人の持つべき經を定め給へり。經に云く法に依て人に依らざれ、義に依て語に依らざれ、知に依て識に依らざれ、了義經に依つて不了義經に依らざれ文。此文の心は菩薩人師の言には依るべからず。仏の御定を用ひよ。（昭定一四一三法華初心成仏鈔）

ここでも、「法華經計り成仏する宗也」と述べているように、日蓮宗は法華經を持つのであるから、我々は成仏しようとするれば出来るはずである。

日蓮聖人は、その生涯を通して、次のような考えを持たれていた。

日蓮は幼少より今生のいのりなし。只仏にならんとをもふ計り也。(昭定一三三四条金吾殿御返事)

又、

南無妙法蓮華経とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切也。……日蓮が弟子檀那の肝要、是より外に求る事なかられ。(昭定一三七六四条金吾殿御返事)

ともいわれ、さらに、

即身成仏と申す法門は、世に流布の学者は皆一大事とたしなみ申す事にて候ぞ。中就く、予が門弟は万事をさしをきて此一事に心を留む可き也。建長五年より今弘安三年に至るまで二十七年の間、在々処々にして申し宣べたる法門繁多なりといへども、所詮は只一途也。(昭定一七九六 妙一女御返事)

と述べられるのである。日蓮門下を名のる我々にとつて、成仏のことは切っても切れぬ問題であり、逆にこのことを心配せぬ者は門弟とは言えぬであらう。

日蓮聖人の生きられた七〇〇年前と、今日とでは時代背景等に差異はあるが、成仏の問題は、釈尊の時代さらに永劫の過去世より変わらぬと思う。日蓮より先の時代に生きた法然は、平安末期の無常と濁悪に満ちた世にあって、現世否定、来世希求の念から、弥陀の来迎を得て西方浄土へ往生する事を、あたかも成仏かの如く弘めたが、日蓮はちがった。現実を逃避して何の成仏があろうと考えるのである。法然は専修念仏を言い、日蓮は題目行を述べた。どちらも易行にちがいないが、その裏付けとなる教学は、なかなかの難行である。題目行の裏付けには天台の教学がある。即ち理観心であり、智恵的に、哲学的に見ようとする見方であるが、これによって修行出来る者は限られてしま

う。日蓮は、現実の生活からこの世界を見ようとする事觀をもつて、一切衆生を仏になそうという大きな理想をもつた人である。

仏の尊い心持ちを、人間の言葉であらわしているのが仏の教えである。仏陀は、ある日突然すべてのことがわかったのではなく、いろいろな方向からごらんになられ、考えられ、悟りを得た。その大きな宇宙の真理とでもいうべき教えをまとめられたのが天台大師である。その流れを汲み、伝教大師、日蓮聖人が続かれ、我々が今、日蓮聖人の教えを受けることによってその心を知り、仏陀の考えをも理解できる道が開ける。現在の我々にとって一番必要な事は、仏の悟りと人間の尊さを知ることである。この無常の世に住む我々も、永遠不滅の仏の悟りを受けることが出来るということだ。がしかし、その内容はあまりにも高度なもので、そこ迄達するには幾段もの段階がある。仏の高い教えに達するには、信をもととして、行、学が具備されねばならぬ。教えを素直に受けることが学であり、そしてそれを行なっていくことが行である。行には種々の行があるが、苦行難行でなく人間性の修行で、無上甚深微妙の行である。それを我々は、今すぐ出来る易行から始めていき、それなりの理解を得て、徐々に深い行の味を知るべきだ。

法華経を信じ流布することは容易なことではない。それを宗祖はなされた。他の宗教をまちがっているものとし、破邪顕正の行動に出られた。その結果迫害にもあわれる。開目抄中に、

日蓮なくば誰をか法華経の行者として仏語をたすけん。……経文に我が身普合せり。御勘気をかほればいよいよ
悦ヒをますべし。(昭定五六〇)

と示されるように、法華経を色読された行者の自覚から、法華経が現実の教えであり、この証あかしをたよりに我々にも二陣、三陣と続けといわれるのである。

この世の中は、まぼろしのごとくにあり、まぼろしの如く消えていく。エネルギー問題等がさげられる今日、世界を救済するぐらいの覚悟をもって生きなければならぬ。

この一日という一日は、その日でしかないこの一日の、自分の命を自分が責任をもち、自分の生きがいを見つけるのである。本当の自分が仏と同じなのだということを発見できるか出来ないかの大切な一日である。が私たちはその事を感じる事なく怠慢にすごしている一日でもある。

我々が明日必ず死ぬという立場に立たされた時、はじめて自覚できるのかもしれないが、その立場にならない今、それと同じ気持になる事が必要である。どうせいつか死ぬのだから、生きているうちは自由に生き、楽しみ、好きなことをして人生を送ろうと考える人は少なくない、だが人間本来の究極の問題を解決せずして、真の楽しみ、人生を確かに生きたという実感があろうはずがない。いかに生き、いかに死ぬかの問題を、もっとまじめに考えたい。その為には、死を見つめ、その中にこそ真の生があることを理解したい。即ち、臨終ただ今にありと自覚し、いつ死んでも悔いの無い充実した日を送るべきである。

我々は、まだ死なないと何気なく思い込み、死を忘れているが、病気、事故等、身近かに死は待っている。その死を前に、大いに生きるといふことが我々の新しい出発である。死ぬという事は生との別れであるが、悔いのない別れが出来るよう平生からの心の準備が大切である。日蓮聖人も死の中に生を感じ、生の中に死を感じられたからこそ、真実の生き方が出来たのである。そして、その中で、人間的に一段も二段も高い段階にのぼられたのである。聖人が経験した迫害等は、今の時代に考えれば、異常な環境であったが、その環境さえも、逆に尊いものと考え、幾度かの絶対絶命の境地に向われる中に、悟後の喜びを知られたのである。この他人には理解できかねるであらう愉快

さを、人にも説得済度させたいと考えられたのが日蓮聖人の全生涯なのだと思う。

あらゆる知識的な探究も大事だが、日蓮聖人の歩いた道の迹を知り、自己をもそれに近づける努力が必要である。現世を力一杯に生きる中に、積尊や日蓮聖人とも感應道交する永遠の生命が存在できるだろう。具体的にどのような生きるかと言えば、心に悪いと知ることは身に行なわず、常に正しく誠実に、かつ骨身を惜しまず勤勉努力すること、経文にもある如く、「不自惜身命・但惜無上道」「情存妙法故・身心無懈怠」の精神でのぞむべきである。

永遠の生命をこの生身の肉体の上に実現できるかどうかと考える時、現在の刻一刻の生活の中にこそ成仏の悟りの道は存在している。